

『解深密経』の結文に関する考察 — 大乘經典編纂の痕跡という観点から —

高橋 晃一

1 はじめに

大乘經典は、何らかの編纂を経て形づくられてきた。初期大乘經典に分類される般若経、法華経、華嚴経なども、原初的な形態に徐々に手が加えられ、時代とともに変容し、発展してきたと考えられている。こうした発展史観は大乘經典を研究するうえで常識となっている。これは中期大乘經典に位置づけられる『解深密経』についても、例外ではなかった¹。

『解深密経』は原題を *Samdhinirmocana sūtra* という。インド大乘仏教の一学派である瑜伽行派の思想と関わりが深い。漢訳の状況などから、おそくとも四世紀頃には成立していたと考えられる。七世紀に玄奘 (602?-664 年頃) がこの經典を翻訳した際の経題が「解深密経」であった。今日では、玄奘訳の経題によって、言語や訳者を特定せずに、この經典を漠然と指すことが多い。サンスクリット原典は断片的にしか現存しない。全体像は、菩提流支 (?-527 年頃) 訳『深密解脱経』、玄奘訳『解深密経』、およびチベット語訳 (訳者不明) で知るほかない。ほかに部分訳として、求那跋陀羅 (394-468 年頃) 訳『相統解脱経』と真諦 (499-569 年頃) 訳『仏説解節経』が残っている。全体は序品を含めて十一章で構成されており、求那跋陀羅訳は最後の二章に、真諦訳は始めの四章に相当する²。

この『解深密経』は、時代と思想の異なる複数の經典を編纂することによって成立したとされている。その根拠として、教説内容が章ごとに分断されていること、部分訳があること、一部の章は単独經典であるかのような様相を呈していることがあげられてきた。近年では、サンスクリット断片の研究から、章ごとに偈文の言語が異なることも指摘されている³。部分訳や単独經典としての体裁は、一般的に經典編纂の根拠とされることが多い。しかし、求那跋陀羅の部分訳について精査したところ、彼が訳したものは『解深密経』の編纂の素材となった単独の經典ではないことが明らかになった⁴。編纂説は根拠の一つを失ったことになる。本稿では、もう一つの有力な根拠とされている、一部の章に見られる単独經典としての体裁に着目し、編纂説の根拠としての妥当性を検証する。

¹ 大乘經典の初期・中期・後期の区分については、『大乘經典解説辞典』(19-25 頁)、岡田 [2010: 195-197] などを参照。

² 章立ては翻訳により異なり、菩提流支訳とチベット語訳は十一章、玄奘訳は八章とする。これは前二者の第二章から五章に相当する部分を、玄奘訳では一つの章にまとめているため、内容に過不足があるわけではない。基本的には十一章立てと見て差し支えない。

³ 『解深密経』編纂説の根拠は、Matsuda [2013: 943] に簡潔にまとめられている。要約すると以下のようになる。(1) 単一經典でありながら、偈の言語が章ごとに異なる。(2) アーラヤ識や三性、唯識という教説が各章ごとに説かれるが、それらが相互に関連付けられていない。(3) 第七章から十章は、本来は経末に見られる結文を有する。(4) 第九章と十章、第一章から四章が個別の經典として漢訳されている。(原文は英語) (ただし、この論文は編纂説の妥当性を論じたものではなく、通説をまとめながら写本に基づく新知見を紹介したものであり、特に (1) の指摘は重要である。)

⁴ 高橋 [2014] 参照。

2 『解深密經』の「結文」に関する諸説

『解深密經』の最後の四章、すなわち玄奘訳で第七章「無自性相品」、第八章「分別瑜伽品」、第九章「地波羅蜜多品」、第十章「如来成所作事品」の末尾には、「結文」と呼ばれる一節が付されている。例えば、第七章「無自性相品」は、次のように終わっている。

このようにおっしゃると、世尊にパラマールタサムドガタ菩薩が次のようにお願ひした。「世尊よ、この解深密の法門におけるこの説示の名称は何でしょうか。これはどのように受け取られるべきでしょうか。」

世尊が彼におっしゃった。「パラマールタサムドガタよ、これは勝義の了義を説くものであり、これは勝義了義を説くものであると受け取るがよい。」

この勝義の了義を説くものが解説されたとき、六十万の衆生は無上正等覚に対する心が生じた。三十万の声聞は諸法に対する法眼が塵なく、垢を離れ、清浄になった。十五万の声聞は執着せず、穢れから心が解放された。七万五千の菩薩は無生法忍を得た。(原文は本稿末の資料参照。)

このように結文では、各章の説示の名称を明かし、その後に聴衆が得る果報を列挙する。ほかの章の結文も定型的な表現で、よく似ている。内容を一覧表にすると次のようになる。便宜上、章名、本文などは玄奘訳を用いる。(原文・訳は本稿末の資料参照)。

		無自性相品	分別瑜伽品	地波羅蜜多品	如来成所作事品	
説示名		勝義了義之教	瑜伽了義之教	諸地波羅蜜多了義之教	如来成所作事了義之教	
聴衆	衆生(六十万)	發阿耨多羅三藐三菩提心	發阿耨多羅三藐三菩提心	(衆生、声聞への言及なし)		果報
	声聞(三十万)	遠塵離垢。於諸法中得法眼淨	遠塵離垢。於諸法中得法眼淨			
	声聞(十五万)	永盡諸漏心得解脱	諸漏永盡心得解脱			
	菩薩(七万五千)	得無生法忍	獲得廣大瑜伽作意	得菩薩大乘光明三摩地	得圓滿法身證覺	

この結文を経典の編纂と関連付けて論じたのは、宇井[1930]に始まる。それによれば、いわゆる結文は明らかに一つの經の結末を示しているので、本来の『解深密經』は「無自性相品」で終わっており、「分別瑜伽品」以下の章は後の付加であると断じている⁵。また

⁵ 宇井[1930: 84]「無自性相品即ち聖者成就第一義菩薩品の終には此經を何と名づくべきかを説明し、大会中にて衆生声聞菩薩が各得果あつたことを述べ、明に一經の結末を示して居るし、此以後

同時期に Lamotte [1935] も、一部の章に結文があることから、『解深密経』は複数の經典の寄せ集めであるとしている⁶。前者は漢訳資料に基づいており、後者はチベット語訳を諸漢訳と比較した考察の結果だが、いずれも同様の結論にたどり着いたことは興味深い。その後、この見解は定説化し、今日に至っている⁷。

しかし、結文を伴うことが、必ずしも各章が単立の經典であったことを意味しない、との見解もある。勝呂 [1985] によれば、『解深密経』の結文は単に章の終わりを示しているに過ぎないという⁸。なお、同論文では、結文は「この経から一品ないし数品を抜き出して、独立に流布させる」ために付されたと推測している（勝呂 [1985:292]）。

このように、結文は編纂から見れば、寄せ集めであることを裏付ける資料として解釈されるが、それを認めない立場にたてば、十分な証拠足りえない。そもそも、經典の結末とはどのようになっているのか、また經典に編纂が施された場合、その結末部分はどのように処理されるのか、一般的な傾向がわからなければ、『解深密経』の例をどのように解釈すべきか、判断はつかない。

3 大乘經典にみる編纂の痕跡

大乘經典は少なからず編纂されているが、その方法は一様ではない。中核になる經典に対する付加や増広、章の入れ替え、あるいは単行經典の合冊を行う例もある。ここでは、一般的に編纂によって成立したと考えられている華嚴経、法華経、大集経を取り上げ、そこに見られる編纂の痕跡を確認する。

まず、華嚴経は、『六十華嚴』として、仏陀婆陀羅（359-429年頃）によって五世紀初頭に漢訳された。しかし、この経の一部はそれ以前にすでに中国に紹介されている。例え

の各品の終に一々かかる結末を示す文句が存するから、これ即ち無自性相品で元來の一經が終り、其他は各品独立であったものが後に附加されたことを表して居るのである。」

⁶ Lamotte [1935: 17] Dans toutes le versions, après chaque chapitre ou chaque groupe de chapitres, se trouve une finale où *Samdhinirmocana*, terme general, est opposé au *Nitārthanirdeśa* particulier qui vient d'être traité. ... Ainsi donc, pour les anciens traducteurs, le *Samdhinirmocana* n'est qu'une collection de sutra particuliers. Ceux-ci ne forment pas nécessairement les chapitres d'un ouvrage; ils constituent des tous complets en eux-mêmes. (すべての異本において、各章の後、または章のまとまりごとに、結末があり、そこでは一般的な語である“*Samdhinirmocana*”が、扱われた内容に由来する、固有の“*Nitārthanirdeśa*”と対比されている。〔略〕このように、古い翻訳家たちにとって、『解深密経』は別個の經典の寄せ集めでしかないのである。これらは必ずしも一つの作品の章を形成していない。それらは、それらそのものの中で、完成された全体を構成している。)

⁷ 袴谷 [1994: 224-225] では、結文中の「解深密の法門」という表現に註を付し、「經典成立史上、ここまでが一区切りと思われた時期があったことを証しているかもしれない」とする。

⁸ 勝呂 [1989: 291-293] 「この経が歴史的に増広されたと解釈されるような事象がないわけではない。その一つは無自性相品（玄奘訳第五品、チベット訳第七品）以下の諸品がそれぞれ結文を有し、あたかもそこが一經の終わりであるような観を呈していることである。（略）しかし結文が存するからといって、それが流通分のごとく一經の終わりをあらわすと解釈することは早計であろう。『解深密経』の結文は簡単なものであって、いわゆる流通分というほどの内容を具えていない。またこの結文は一經全体に対する結文でなく、諸品それぞれに対する結文であって、大体同文で表現されていることが特徴的である。（略）

(p.293) 以上のように見るならば、この経が歴史的に増広されたものではなく、一時の成立であることを推定するのにさまたげとなる理由はないと思う。」

*なお、勝呂 [1976] には、結文に関する考察はない。

ば、「十地品」は、『漸備一切智徳経』として、三世紀末に竺法護(239-316年頃)によって翻訳されている。この部分は華嚴経のなかでも特に古い要素のひとつで、『十地経』の名で、単行独立の経典として流布していたことはよく知られている。一説には、この経を中心に拡大増広されたものが華嚴経であるともいう(『大乘経典解説辞典』121頁上参照)。竺法護訳は、『十地経』の最古の漢訳である。この竺法護訳の末尾に着目すると、「すべての聴衆は金剛藏菩薩の説いたものを聞き、喜ばないことがなかった。(大10497b15-16:一切会者、聞金剛藏菩薩所説、莫不歡喜。)」となっている⁹。現存するサンスクリット本『十地経』も同様の内容で経典を終えており、チベット語訳『華嚴経』「十地品」も、この表現を具えている¹⁰。しかし、仏陀婆陀羅訳『六十華嚴』の「十地品」には、金剛藏菩薩の説法を聴衆が喜ぶというくだりはない(大9578a)。唐代の実叉難陀(652-710年頃)訳『八十華嚴』も同様である(大9210c)。「聴衆が説法を喜んだ」という一節は、華嚴経の編纂過程で経末から削除されたのであろうか。それにしても、漢訳の華嚴経が依拠したサンスクリット原典の相違なのか、翻訳の際の編集なのかは定かではない。しかし、チベット語訳『華嚴経』を見る限り、少なくともこの表現を残した原典もあったと考えられる。チベット語訳『華嚴経』は、単行経典の末尾が増広後も残っている例といえる。¹¹

法華経もまた、サンスクリット語原典と諸漢訳の間で異同が見られるだけでなく、漢訳諸本の間で、すでに大きな相違が見られることはよく知られている¹²。もっとも顕著な例としては、竺法護訳『正法蓮華経』が「囑累品」を最終章としているのに対して、羅什(344-413年頃、または350-409年頃)訳『妙法蓮華経』は、これを全二十八章中の第二十二章においていることがあげられる。この相違は、七世紀初頭の訳である『添品妙法蓮華経』の序で言及されて以来、中国の学僧の間で議論され、また今日の研究者の関心事ともなっている。法華経の成立史と内容の理解に深くかかわる問題だが、本稿では経末の形式にのみ着目する。竺法護訳の経末にあたる「囑累品」は、「この経を聞いた聴衆たちが喜ばないことがなかった」と締めくくられている¹³。一方、羅什訳は、「囑累品」を最終章としていないが、やはりブツダの説法を聞いて、聴衆が大いに喜んだという一節で、この章を終えている¹⁴。ちなみに羅什訳の最終章は「普賢菩薩勸発品」で、その結末も「ブツ

⁹ 羅什訳『十住経』(大10535a17-19)、尸羅達摩訳『仏説十地経』(大10574c8-14)も同様の記述がある。

¹⁰ 『梵文大方広華嚴経十地品』p.219: idam avocad bhagavān ātmanās te vimukticaṃdrapūrvamgamā bodhisattvagaṇā vaśavartidevarājapramukhāḥ sarvadevādhipatiśvarās ca mahānaṃdapūrvamgamās ca sarvamahāśrāvākagaṇāḥ sadevamānuṣāsuraagamdhavaś ca lokah sā sarvāvati paśad bhagavato vajragarbhasya bhāṣitam abhyanaṃdann iti //
チベット語訳『華嚴経』「十地品」(北京版761番, li168a5-6): byang chub sems dpa' 'khor de dag thams cad dang / lha dang klu dang gnod sbyin dang / dri za dang lha ma yin dang / brgya byin dang tshangs pa dang / 'jig rten mgon dang / dbang phyug chen po dang / gtsang ma'i ris su gtogs pa'i lha thams cad kyang mngon par dga'o //

¹¹ 華嚴経の成立史の概要は、伊藤[1983]を参照。

¹² この問題は佐々木[1968]に簡潔にまとめられている。

¹³ 佛説是経時、十方無量異佛世界諸來大聖、坐佛樹下處師子座、多寶如來及大士等、諸餘學行現佛前者、不可計會無數無量、并從地中踊出菩薩、諸大聲聞四部之衆、諸天龍神阿須倫捷查和世間人民、聞佛所説、莫不歡喜。(大9134b14-19)

チベット語訳も同様である(北京版781番, Chu 204b)。

¹⁴ 爾時釋迦牟尼佛令十方來諸分身佛各還本土、而作是言、諸佛各隨所安、多寶佛塔還可如故。説是語

ダがこの経を説いたとき、普賢菩薩をはじめとするすべての聴衆は大いに喜び、ブツダの言葉を受持し、礼をして帰って行った」となっている。経の結末らしく整えているような印象を受ける¹⁵。竺法護訳では第二十六章「樂普賢品」（すなわち最終章である「囑累品」の直前の章）がこれに対応するが、上記の一節はない（大9 134a）。文言だけを見れば、羅什訳の「囑累品」は経末でないにも関わらず、経末にあるべき表現が入り込んでいるように見える¹⁶。經典編纂の痕跡といえるのではなかろうか。

さらに、編纂によって成立した經典として大集經がある。華嚴經や法華經に比べて研究は少ないが、原初形態はこれらと同時期に作成され、思想的にも独特の傾向を示しており、重要な經典である。大集經は漢訳では『大方等大集經』六十巻として曇無讖（385–433年頃）によって漢訳された。全体は十七章からなるが、実態は複数の単立經典を合冊したもので、首尾一貫した内容があるわけではないといわれる¹⁷。いくつかの章は単行の經典として、曇無讖に先んじて竺法護により訳出されている。チベット大蔵経も、それらを単行の経として訳出している¹⁸。章末、あるいは経末についていえば、大集經のほとんどの章は「聴衆が喜んだ」という表現で終わっている¹⁹。

時、十方無量分身諸佛一坐寶樹下師子座上者、及多寶佛并上行等無邊阿僧祇菩薩大衆、舍利弗等聲聞四衆、及一切世間天人阿修羅等、聞佛所説、皆大歡喜。（大9 52c26–53a3）

¹⁵ 佛説是經時、普賢等諸菩薩、舍利弗等諸聲聞、及諸天龍人非人等、一切大會、皆大歡喜、受持佛語、作禮而去。（大9 62a27–29）

¹⁶ 「囑累品」の位置が異なる理由について、佐々木 [1968] では、サンスクリット語原典が異なっていたと考えることが妥当としている。また、「藥王品」以下の六章分を後世の付加とし、それらが付加されたのちに「囑累品」が経末に移動されたとみるのが定説となっていることを紹介している。（佐々木 [1968: 572–573]）

¹⁷ 金岡 [1970: 149–150]。

¹⁸ 大集經の概要は、金岡 [1970: 142–167] を参照。

¹⁹ 第二章「陀羅尼自在王品」、第三章「宝女品」、第十二章「無尽意菩薩品」の例をあげておく。これらは竺法護が訳出し、またチベット大蔵経にもおさめられている。

(1) 『大集經』「陀羅尼自在王品」：説是經已。人天大衆歡喜頂戴信受奉行。（大13 28b17–21）

『大哀經』（竺法護訳）：佛説如是。總努王菩薩十方世界來會開土。諸大弟子釋梵四王、天龍鬼神健香和阿須倫迦羅羅真陀羅摩睺勒比丘比丘尼童女童女、一切衆會諸天世人、聞佛所説莫不歡喜。（大13 452a12–16）

チベット語訳：bcom ldan 'das kyis de skad ces bka' stsal nas / byang chub sems dpa' 'gzungs kyi dbang phyug gi rgyal po dang / byang chub sems dpa'i tshogs dang / nyan thos kyi tshogs de dag thams cad dang / lha dang / mi dang / lha ma yin dang / dri zad bcas pa'i 'jig rten yid rangs te / bcom ldan 'das kyis gsungs pa la mngon par bstod do // (北京版 814 番, nu204b1–2)

(2) 『大集經』「宝女品」：爾時阿難及諸人天聞經歡喜信受奉行。（大13 40b）

『宝女所問經』（竺法護訳）：佛説如是。寶女阿難一切衆會諸天人民阿須倫世間人間經莫不歡喜。（大13 473b）

チベット語訳：bcom ldan 'das kyis de skad ces bka' stsal ba dang / tshe dang ldan pa kun dga' bo dang / bu mo rin chen dang lha dang mi dang / lha ma yin dang / dri zar bcas pa'i 'jig rten bcom ldan 'das kyis gsungs pa la yid rangs ste mngon par bstod do // (北京版 836 番, phu323a4–5)

(3) 『大集經』「無尽意菩薩品」：佛説是已。無盡意菩薩摩訶薩、尊者阿難舍利弗、諸天龍神乾闥婆阿修羅等、一切大衆莫不歡喜、作禮而去。（大13 212c）

『阿差末菩薩經』（竺法護訳）：佛説如此。阿差末菩薩、賢者阿難、諸天龍神、莫不歡喜、稽首而去。（大13 612b）

チベット語訳：bcom ldan 'das kyis de skad ces bka' stsal nas / byang chub sems dpa'i tshogs de dag thams cad dang / byang chub sems dpa' sems dpa' chen po blo gros mi zad pa dang / gnas brtan shaar dra ti'i bu dang(sic) / dge slong de dag thams cad dang ldan pa'i khor de dang / lha dang / mi dang lha

これらの例では、本来は經典の末尾に位置していたと思われる箇所「説法を聞き、聴衆が喜ぶ」という表現が見られる点に共通点がある。これは阿含經にすでにみられる經末の定型的な表現で「歡喜奉行」と漢訳されることはよく知られている²⁰。大乘經典の場合も、末尾には「歡喜奉行」に相当する表現があることが多い。上で取り上げた例は、原初的な經典の結末にあった「歡喜奉行」の一節が、増広や合冊後も残されている例と考えるべきであろう。經典編纂の痕跡を探る一つの目安といえる。

4 『解深密經』の結文は編纂の痕跡なのか？

『解深密經』の結文の場合、「説法を聴衆が喜ぶ」という内容は、第十章「如来成所作事品」の末尾、すなわち『解深密經』全体の結末部分にのみ記されている。第七章から九章までは、これに言及しない（本論末の対照テキスト参照）。主要な大乘經典では、編纂が行われた場合、本来經典末尾にあったはずの「説法を喜ぶ」という表現がそのまま残されている場合が多かったのに対して、やや異質な印象を受ける。

『解深密經』の結文が、説示名の開示と聴衆が得る果報の列挙で構成されていることはすでに述べた。こうした表現が經典の終わりに来ることはあり得る。しかし、必ずしも經の末尾に置かれるわけでもない。例えば、『金剛般若經』では、經典全体のちょうど中ほどで、スプーティがブツダに対して「この法門の名は何でしょうか」と尋ねる場面がある²¹。表現自体は『解深密經』の結文の前半部分と似ている。しかし、『金剛般若』の場合は、この法門の名称がプラジュニャーパーラミターであることを明かしたのち、「如来によって説かれたプラジュニャーパーラミターはパーラミターでないものがと説かれた、それゆえにプラジュニャーパーラミターと言われる」と、『金剛般若』特有の論法によって議論を深めてゆく構成になっている²²。これは極端な例としても、こうした表現が必ずしも經典末尾を示すわけではないことがわかる。なお、この經典の結末は、聴衆が説法を喜ぶというくだりで終わる（渡辺 [2009b: 128 (§32b)] 参照）。

また、『解深密經』「無自性相品」の結文の後半のように、菩薩が説法を聞いて無生法忍を得るという内容は、しばしば經典にみられるが、これも必ずしも經典の結末部分に来るわけではない。例えば、よく知られている『維摩經』「不二法門品」は、菩薩たちが不二

ma yin dang / dri zar bcas pa'i 'jig rten yid rangs te / bcom ldan 'das kyis gsungs la mngon par bstong ngo // (北京版 842 番, bu 179b8-180a2)

²⁰ 『大乘經典解説辞典』(27 頁下-28 頁上) 参照。

²¹ evam ukta āyusmān subhūtir bhagavaṃtan etad avocat / ko nāmāyaṃ bhagavan dharmaparyāyaḥ kathaṃ cainaṃ dhārayāmi / evam ukte bhagavān āyusmaṃtaṃ subhūtim etad avocat / prajñāpāramitā nāmāyaṃ subhūte dharmaparyāyaḥ / evaṃ cainaṃ dhāraya / tat kasya hetoḥ / yaiva subhūte prajñāpāramitā tathāgatena bhāṣitā saivāpāramitā tathāgatena bhāṣitā / tenocyate prajñāpāramiteti / (渡辺 [2009b: 60-61] §13a 所載の Max Müller 校定本を参照した。)

[和訳] このように言われたとき、尊者スプーティは世尊に次のように言った。「世尊よ、この法門の名は何でしょうか。また、私はこれをどのように受け取るのでしょうか。」

このように言われたとき、世尊は尊者スプーティに次のように言った。「スプーティよ、この法門はプラジュニャーパーラミターという。また、そのようにこれを受持せよ。それはなぜか。スプーティよ、如来によって説かれたプラジュニャーパーラミター、ほかならぬそれは、如来によってパーラミターでないものが説かれたのである。それゆえに、プラジュニャーパーラミターと言われる。」

²² このような論述形式は「即非の論理」と呼ばれる。詳細は渡辺 [2009a: 40-47] 参照。

法門に入り、無生法忍を得ると説いて終わる²³。これは「不二法門品」の結末に見られる一節で、章の終わりで聴衆が得る果報を示す例といえる。「不二法門品」は経末ではないので「聴衆が喜ぶ」という表現はない。ちなみに『維摩經』全体の結末は、やはり聴衆が喜んだとして終わっている（梵蔵漢対照『維摩經』p.508 参照）。このように、『解深密經』の結文は、必ずしも一つの経の終わりを示しているとは言えない²⁴。

さらに、『解深密經』の結文の中では菩薩が得る果報が説かれているが、それらは無生法忍の獲得から始まり、廣大瑜伽作意、大乘光明三昧、円満法身証覚という順で、次第に境地が深まっていく様子を表しているようにみえる（本稿第2節の表参照）。「廣大瑜伽作意」と「大乘光明三昧」の内容は説明がなく、不明だが、このように菩薩の果報だけを並べてみると、第八章「分別瑜伽品」以下の章が単純に継ぎ足されていったとは思えない。実際、これらの果報は、「廣大瑜伽作意」を除いて、『無上依經』という經典でひとまとめにして説かれている²⁵。『無上依經』は『瑜伽師地論』から影響を受けたともいわれており、その中には「撰決撰分」に引用される『解深密經』の内容と関わるものもある（高崎[2010: 118]）。したがって、『無上依經』は、『解深密經』の結文の内容を一連のものとして捉えていると見ることもできる。結文で説かれる果報の相互関係については、『解深密經』の教説の理解を踏まえて論じなければ意味がないが、本稿ではそこまで踏み込むことができない。ここでは、『解深密經』の結文が単に章の終わりを示しているだけでなく、經典の後半の内容について、文脈を明示するはたらきをしている可能性を指摘しておく。

5 『解深密經』の流通分に関する諸資料の分析

『解深密經』の結文の問題は、そもそも、この經典に流通分がないと考えられていることに深くかかわっている。中国の伝統的な科段の立て方では、經典は本論に当たる「正宗分」のほか、本論の前に「序分」を、末尾に「流通分」を具えていることが理想とされる²⁶。玄奘訳『解深密經』の流通分については、古くからいくつかの解釈があった。『国訳大蔵經』（經部第十卷）の「解深密經解題」では、円測（613–696年）や江戸時代の基弁（1722–1791年）によって提唱された流通分に関する所見を紹介しながら、玄奘訳『解深

²³ *Vimalakīrtinirdeśa* (梵蔵漢対照『維摩經』Chap.VIII §33) *iha nideśe nirdiśyamāne pañcānām bodhisatvasahasrāṇām advayadharmamukhapraveśād anutpattikadharmakṣāntipratilambho bhūṭ //*〔和訳〕いまや、教令が説かれたとき、五千の菩薩たちには、不二の法門に入ってから、無生法忍の獲得が起こった。（この一節は最古の漢訳である支謙訳にはない。梵蔵漢対照『維摩經』の当該箇所参照。）

²⁴ 勝呂[1989: 291]では、『解深密經』の結文は簡単なもので、いわゆる流通分というほどの内容を示していないことが指摘されている。（本稿注8参照）

²⁵ 『無上依經』「如来事品」（大16 476c1–7）：佛説此經已。是此大會中七萬五千菩薩摩訶薩即得證見圓滿法身。復有七萬五千菩薩摩訶薩即得大乘妙光三昧。復有七萬五千菩薩摩訶薩於一切法得無生忍。無數阿僧祇衆生於無上菩提起不退心。無量阿僧祇衆生遠塵離垢得法眼淨。復有無量衆生得增上果。なお、『無上依經』は『宝性論』にもとづいて作成された經典であることが指摘されている（高崎[2010] 第二部第二、三章参照）。ただし、本稿で言及した内容は『宝性論』と直接かかわりがないとされている（高崎[2010: 100–101, 111]参照）。高崎[2010]では言及がないが、『無上依經』のこの箇所は『解深密經』との関係が予想される。

²⁶ 「序分」「正宗分」「流通分」の枠組みについては、『大乘經典解説辞典』（28–30頁）参照。

密経』には流通分がないという見解をとっている²⁷。また、『国訳一切経』（経集部三）の「解深密経解題」でも、経全体に対する流通分はないとしている²⁸。流通分がどのようなものか、必ずしも定型があるわけではないが、これらの解釈は、端的には、玄奘訳『解深密経』に「歡喜奉行」の一節がないことを意図している。

しかし、玄奘訳以外の全訳である菩提流支の『深密解脱経』や、チベット語訳の『解深密経』にはいわゆる「歡喜奉行」に相当する部分がある。チベット語訳から引用すると次のようになっている。

世尊がこのように教示なさると、マンジュシュリー法王子と、すべてを具えた会衆と、天と人とアスラをともなう世間は喜び、世尊が説かれたものを讃歎した。（本論末の資料参照）

菩提流支訳、玄奘訳、チベット語訳はすべて異なる原典から翻訳されたと考えるべきなので、サンスクリット原典の段階で、「聴衆が喜ぶ」という一節がある伝承（菩提流支訳、チベット語訳の原典）と、それがない伝承（玄奘訳の原典）があったことになる。ところで、大正新修大蔵経に収められている玄奘訳『解深密経』のテキストには「歡喜奉行」の一節がないにも関わらず、円測の『解深密経疏』には、玄奘訳にもこの表現があったかのような記述が見られる。円測は次のように述べている。

一説に言う。この経には以下の五つの部分がある。一つ目は教起の因縁であり、即ち序分（序品第一）である。二つ目は等しからざる境界の部分であり、すなわち次の四章（勝義諦相品第二、心意識相品第三、一切法相品第四、無自性相品第五）である。三つ目は等しからざる行いの部分であり、すなわち次の二章（分別瑜伽品第六、地波羅蜜多品第七）である。四つ目は等しからざる果報の部分であり、すなわち最後の一章（如来成所作事品第八）である。五つ目は依教奉行の部分であり、即ち経の終わりの「歡喜奉行」である。²⁹（括弧内の玄奘訳の章題は筆者が補う。）

これは序分に関する解説の中で述べられたものであり、『解深密経』の全体的な構成に関する異説として紹介されている。正統説ではないが、章の数が序品を含めて八章になることから、玄奘訳『解深密経』について述べられているとしか考えられない。もう一つの

²⁷ 佐伯 [1917: 11-12] 「[組織] 一部五卷八品、分かつて二分となす。初の一品を序分、即ち本経の興る由緒を説けり。次の七品は正宗分、すなわち本経正旨の在る所なり。（後略）」

（前略）又た経の終に、普通ある可き作禮而去の儀式を缺けるが如き、是れ報土不轉の意味を顯わすものにして、良遍僧都『傳通要録』に「事絶 一 常途 一、旨在 一 言外 一」と讃歎するは即ち是れなり。（以下、円測、基弁の見解を概説。）

²⁸ 深浦 [1933: 10] 「以上の所述によれば、本経はたゞ序・正二分のみにして流通の相見えず、よつて大に経論解釋の常規に違するやうに思はれる。そこで、古来これについて種々の解釋を立て、或は流通あるの義を叙し、或はそのなきの義を述べてゐる。惟ふに、無自性相品以下の四品には、何れも依教奉持の文あつて、それら各品の結辭たるが如き趣きを呈せるも、未だ経末に、一部に通ぜざる流通の文とては、これを認むることが出来ない。（中略）而して今本経にあつては、本宗の正統よりすれば、流通を立てない説を採つてゐる。」

²⁹ 『解深密経疏』180a2-5：一云此経有其五分。一教起因縁。即是序分。二無等境界分。謂次四品。三無等行分。謂次二品。四無等果分。謂後一品。五依教奉行分。謂即經末歡喜奉行。（円測の『解深密経疏』はチベット語に翻訳されているが、この箇所はチベット語訳では欠落している。チベット語訳『疏』ti 40b 参照。）

全訳である『深密解脱経』は十一章よりなるので、どう数えても章の数が合わない。しかし、玄奘訳について述べているとすると、一つ不可解な点がある。五番目の「依教奉行分」について、経末の「歡喜奉行」であるとされているが、現存する玄奘訳の末尾には「歡喜奉行」という文言はない。しかし、円測の記述では、彼が註をつけた原文に「歡喜奉行」とあったことを示唆しているかのように見える。『解深密経疏』で経典の結末に関する注釈を確認できれば、直ちに解決するかもしれないが、円測の疏は最後の第十巻は散逸しているため、原文を見ることができない。ただし、この疏は法成（九世紀頃）によりチベット語に翻訳されているので、散逸箇所の内容を確認することはできる。それによれば、流通分に関して次のような説が紹介されている。

ある人が（以下のように）言う。初めの二つの部分は、先の二説と一致する³⁰。第三、すなわち流通分 (bka' bzhin du yang dag par bsgrub pa'i phyogs : 教示通りに完成する部分) は別にある。『深密解脱経』には、「このように菩薩摩訶薩であるマンジュシュリー法王子と天、人、アスラとともにあるすべての会衆が喜んだ」³¹と説かれているように、他の経に（この）文言がないのは、インドの事例そのものが一致しないからである。あるいは翻訳者の考えが異なるからである。³²

これによれば、菩提流支訳『深密解脱経』には「歡喜奉行」という文言があったのに対して、他の漢訳にはそのような表現がなかったことがわかる。理由はインドから将来した原典の異読とも、翻訳者の見解の相違ともされるが、現存する資料から理由を確定することは難しい。少なくとも円測が見ていた玄奘訳『解深密経』に関して言えば、やはり「歡喜奉行」に関する一文はなかったことになる。「歡喜奉行」を含んでいたかのような解説はあくまで異説なのであろう³³。

いずれにしても、「説法を喜ぶ」という一節が経典末尾に置かれている例があることからすると、いわゆる結文は経典編纂の痕跡というよりは、単に章の結末を示しているものと見るべきであろう。

³⁰ 先の二説では、玄奘訳『解深密経』は序分（序品第一）と正宗分（本論の七章分）の二部よりなり、流通分はないとする。「先の二説と一致する」とは、序品第一を序分に、「勝義諦相品第二」から「如来成所作事品第八」を正宗分にあててをいう。

³¹ 『深密解脱経』大 16 688a24-25: 文殊師利法王子菩薩摩訶薩、及諸一切天人阿修羅大衆、歡喜奉行。

³² kha cig na re phyogs dang po gnyis ni bshad pa snga ma gnyis dang mthun no // gsum pa bka' bzhin du yang dag par bsgrub pa'i phyogs ni logs na yod de / dngons pa zab mo nam par dgrol ba'i mdo las ji skad du byang chub sems dpa' sems dpa' chen po 'jam dpal chos kyi rgyal bu dang / lha dang mi dang lha ma yin dang bcas pa'i 'khor thams cad rab tu dga'o zhes gsungs pa lta bu'o // mdo gzhan dag las tshig mi byung ba ni rgya gar gyi dpe nyid mi mthun pa'i phyir ro // yang na lo tsaa ba dag gi bsam pa tha dad pa'i phyir ro zhes zer te / (『解深密経疏』法成訳 北京版 5517 番, di 197b2-5)

³³ ところで、流通分に関しては、もう一つ不可解なことがある。チベット語訳『解深密経』には確かに「聴衆が喜ぶ」という一節があるのだが、河口慧海将来写本などのテンパンマ写本系に属するチベット語訳テキストには一貫してこの表現がない。現在のところ、理由は判らない。ただ、チベットの伝承でも、「歡喜奉行」という表現がないものが含まれていることになる。玄奘訳だけの問題ではないかもしれない。河口本の詳細は加藤 [2003] 参照。

まとめ

従来、『解深密経』は、時代と思想が異なる複数の素材を編纂して成立したと考えられてきた。それを裏付ける客観的な根拠として、部分訳があること、後半の四章が結文を伴うことなどがあげられていた。しかし、部分訳は『解深密経』の編纂の素材となった単行の経典ではないことが明らかになり、編纂成立説を再考する必要性が生じた。本稿では、もう一つの根拠である結文について考察を加えた。

結文の文言を見る限り、一般的に経典の結末に見られる「歓喜奉行」という表現がなく、合冊編集した場合に見られるような、単立経典の末尾の痕跡とは言えないという印象を受ける。また、結文を並べてみると、菩薩が得る果報は一連の文脈を形成している可能性が指摘できる。したがって、後半のいくつかの章が単純に継ぎ足されたと考えことは早計ではなかろうか。結文を経典編纂の痕跡と見ることは他の用例と照らしてみても再考の余地があると言える。少なくとも、結文があることを根拠に、編纂が行われたと断定することは難しい。

本稿では、結文の字面について表面的な考察のみを行ったが、『解深密経』の成立について考える場合、教説内容の面から全体的な論旨の構成を見直す必要があるだろう。(終)

資料：『解深密経』結文 対照テキスト

Chap.7 D ca 28b4-7; P ngu27b7-28a4

de skad ces bka' tsal pa dang / bcom ldan 'das la byang chub sems dpa' don dam yang dag 'phags kyiis 'di skad ces gsol to // bcom ldan 'das dgongs pa nges par 'grel pa'i^I chos kyi rnam grangs 'dir bstan pa 'di'i ming ci lags / 'di ji ltar gzung bar bgyi / bcom ldan 'das kyiis de^{II} la bka' tsal pa / don dam yang dag 'phags 'di ni don dam pa'i nges pa'i don bstan pa yin te / 'di don dam pa nges pa'i don bstan pa zhes bya bar zung shig / don dam pa'i^{III} nges pa'i don bstan pa 'di bshad pa na srog chags drug 'bum ni bla na med pa yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu sems skyes so // nyan thos sum 'bum ni chos rnam la chos kyi mig rdul med cing dri ma dang bral ba rnam par dag go // nyan thos 'bum lnga khri ni len pa med par zag pa rnam las sems rnam par grol lo // byang chub sems dpa' bdun khri lnga stong gyis ni mi skye ba'i chos la bzod pa thob par gyur to //

I) pa'i D; ba'i P, II) de D; da P, III) pa'i D; pa P

このようにおっしゃると、世尊にパラマールタサムドガタ菩薩が次のようにお問い合わせした。「世尊よ、この解深密の法門におけるこの説示の名称は何でしょうか。これはどのように受け取られるべきでしょうか。」

世尊が彼におっしゃった。「パラマールタサムドガタよ、これは勝義の了義を説くものであり、これは勝義了義を説くものであると受け取るがよい。」

この勝義の了義を説くものが解説されたとき、六十万の衆生は無上正等覚に対する心が生じた。三十万の声聞は諸法に対する法眼が塵なく、垢を離れ、清浄になった。十五万の声聞は執着なく、穢れから心が解放された。七万五千の菩薩は無生法忍を得た。

『深密解脱經』 674a21–28 :

爾時成就第一義菩薩白佛言。世尊。此深密解脱修多羅中。此法門名為何等。云何奉持。
佛言。成就第一義。此法門名說第一義了義修多羅。汝應如是受持。
佛說此法門時。六千衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。三百千聲聞遠塵離垢得法眼淨。復有五百千聲聞得無漏心解脱。七萬五千菩薩得無生法忍。

『解深密經』 697b28–c :

爾時勝義生菩薩復白佛言。
世尊。於是解深密法門中。當何名此教。我當云何奉持。
佛告勝義生菩薩曰。善男子此名勝義了義之教。於此勝義了義之教汝當奉持。說此勝義了義教時。於大會中有六百千衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。三百千聲聞遠塵離垢。於諸法中得法眼淨。一百五十千聲聞永盡諸漏心得解脱。七十五千菩薩得無生法忍。

Chap.8 D ca 38b5–39a1; P ngu 42b3–7 (Cf. Matsuda [2013: 940]³⁴)

de nas bcom ldan 'das la byang chub sems dpa' byams pas 'di skad ces gsol to //
bcom ldan 'das dgongs pa nges par 'grel pa'i^l chos kyi rnam grangs 'dir bstan pa 'di'i ming
ci lags / 'di ji ltar gzung bar bgyi / bcom ldan 'das kyi de la bka' stsal pa / byang pa 'di ni
rnal 'byor nges pa'i don bstan pa yin te / rnal 'byor nges pa'i don bstan pa zhes bya bar zung
shig / rnal byor nges pa'i don bstan pa 'di bshad pa na srog chags drug 'bum ni bla na med pa
yang dag par rdzogs pa'i byang chub tu sems skyes so // nyan thos sum 'bum ni chos rnams
la chos kyi mig rdul med cing dri ma dang bral ba rnam par dag go // nyan thos 'bum lnga
khri ni len pa med par zag pa rnams las sems rnam par grol lo // byang chub sems dpa' bdun
khri lnga stong gyis ni rnal 'byor chen po'i yid la byed pa thob par gyur to //

I) pa'i D; ba'i P

その時、世尊に弥勒菩薩が次のようにお願いした。「世尊よ、この解深密の法門におけるこの説示の名称は何でしょうか。これはどのように受け取られるべきでしょうか。」

世尊が彼におっしゃった。「弥勒よ、これは瑜伽（という）了義を説くものであり、瑜伽（すなわち）了義を説くものであると受け取るがよい。」

この瑜伽（という）了義を説くものが解説されたとき、六十万の衆生は無上正等覺に対する心が生じた。三十万の声聞は諸法に対する法眼が塵なく、垢を離れ、清浄になった。十五万の声聞は取なく執着せず、穢れから心が解放された。七万五千の菩薩は大瑜伽の作意を得ることとなった。

『深密解脱經』 680a10–17 :

爾時彌勒菩薩摩訶薩白佛言。世尊。此深密解脱經中。當何名此法門。云何奉持。
佛言。彌勒。此法門名為如實修行了義修多羅。汝當奉持。
說是如實修行了義修多羅時。六千衆生發阿耨多羅三藐三菩提心。三千聲聞遠塵離垢得法眼淨。十萬五千聲聞離諸漏得心解脱。七萬五千菩薩得大乘如實修行觀成就。

³⁴ この一節のサンスクリット語原典は、Matsuda [2013] で紹介されている。

『解深密經』 703a28–b6 :

爾時慈氏菩薩復白佛言。世尊。於是解深密法門中。當何名此教。我當云何奉持。
佛告慈氏菩薩曰。善男子。此名瑜伽了義之教。於此瑜伽了義之教汝當奉持。
說此瑜伽了義教時。於大會中有六百千衆生。發阿耨多羅三藐三菩提心。三百千聲聞遠塵離垢。於諸法中得法眼淨。一百五十千聲聞諸漏永盡心得解脫。七十五千菩薩獲得廣大瑜伽作意。

Chap.9 D ca 48b5–49a1; P ngu53a7–b2

de nas bcom ldan 'das la byang chub sems dpa' spyang ras gzigs dbang phyug gis 'di skad ces
gsol to //

bcom ldan 'das dgongs pa nges par 'grel pa'i I chos kyi rnam grangs 'dir bstan pa 'di'i ming
ci lags / 'di ji ltar gzung bar bgyi / bcom ldan 'das kyis de la bka' stsal pa / spyang ras gzigs
dbang phyug 'di ni sa dang pha rol tu II phyin pa'i nges pa'i don bstan pa yin te / 'di sa dang
pha rol tu III phyin pa'i nges pa'i don bstan pa zhes bya bar zung shig / sa dang pha rol tu
IV phyin pa'i nges pa'i don bstan pa 'di bshad pa na / byang chub sems dpa' bdun khri lnga
stong gyis byang chub sems dpa'i ting nge 'dzin theg pa chen po snang ba thob par gyur to //

I) pa'i D; ba'i P, II) tu D; du P, III) tu D; du P, IV) tu D; du P

その時、世尊に觀世音菩薩が次のようにお願いした。「世尊よ、この解深密の法門におけるこの説示の名称は何でしょうか。これはどのように受け取られるべきでしょうか。」

世尊が彼におっしゃった。「觀世音よ、これは地と波羅蜜の了義を説くものであり、これは地と波羅蜜の了義を説くものであると受け取るがよい。」

この地と波羅蜜の了義を説くものが解説されたとき、七万五千の菩薩は菩薩の三昧である大乘光明を得ることとなった。

『深密解脫經』 685a3–8 :

爾時觀世自在菩薩白佛言。世尊。深密解脫修多羅中。此法門者名為何等。云何奉持。
佛告觀世自在菩薩言。觀世自在。此修多羅名地波羅蜜了義法門。汝今應當如是受持。
說此地波羅蜜了義經時。七萬五千菩薩得大乘光明三昧。

『解深密經』 708a29–b6 :

爾時觀自在菩薩摩訶薩復白佛言。世尊。於是解深密法門中。此名何教。我當云何奉持。
佛告觀自在菩薩曰。善男子。此名諸地波羅蜜多了義之教。於此諸地波羅蜜多了義之教汝當奉持。
說此諸地波羅蜜多了義教時。於大會中有七十五千菩薩。皆得菩薩大乘光明三摩地。

『仏説解節經』 714c1–10 :

爾時。觀世音菩薩。右膝著地。合掌恭敬。而白佛言世尊我今從佛聞得如是解節深法。得未曾有。頂戴奉持。世尊當何名此經云何受持。
佛告觀世音菩薩此經名為了義正説。亦名真實境智正説。亦名十地波羅蜜依止正説。汝等應當如是受持。

佛說是經已八萬菩薩皆得大乘威德三昧，無量無邊諸菩薩衆於無生法得無生法忍，無數衆生從於諸流心得解脫，無數衆生於大乘法生信樂心。

Chap.10 D ca 55b3–6; P ngu60b2–6

de nas bcom ldan 'das la byang chub sems dpa' 'jam dpal gyis 'di skad ces gsol to //
bcom ldan 'das dgongs pa nges par 'grel pa'i I chos kyi rnam grangs 'dir bstan pa 'di'i ming
ci lags / 'di ji ltar gzung bar bgyi / bcom ldan 'das kyis de la bka' stsal pa / 'jam dpal 'di
de bzhin gshegs pa'i bya ba sgrub pa nges pa'i don bstan pa 'di de bzhin gshegs pa'i bya ba
sgrub pa nges pa'i don bstan pa zhes bya bar zung shig / de bzhin gshegs pa'i bya ba sgrub
pa nges pa'i don bstan pa 'di bshad pa na / byang chub sems dpa' bdun khri lnga stong gyis
chos kyi sku yongs su rdzogs pa so so yang dag par rig par gyur to //
bcom ldan 'das kyis de skad ces bka' stsal nas / 'jam dpal gzhon nur gyur pa dang / thams
cad dang ldan pa'i 'khor de dang / lha dang mi dang lha ma yin dang / dri zar bcas pa'i 'jig
rten yi II rangs te / bcom ldan 'das kyis gsungs pa la mngon par bstod do //

I) pa'i D; ba'i P. II) yi D; yid P

その時、世尊に文殊菩薩が次のようにお願いした。「世尊よ、この解深密の法門におけるこの説示の名称は何でしょうか。これはどのように受け取られるべきでしょうか。」

世尊が彼におっしゃった。「マンジュシュリーよ、これは如来の完成された所作（という）了義を説くものであり、これは如来の完成された所作（という）了義を説くものであると受け取るがよい。」

この如来の完成された所作（という）了義を説くものが解説されたとき、七万五千の菩薩は法身が現観することを自内証することとなった。

世尊がこのように教示なさると、マンジュシュリー法王子と、すべてを具えた会衆と、天と人とアスラをともなう世間は喜び、世尊が説かれたものを讃歎した。

『深密解脱經』 688a18–25 :

爾時文殊師利法王子菩薩白佛言。世尊。此深密解脱修多羅中。此法門當名何等。云何奉持。佛告文殊師利法王子菩薩言。文殊師利。此法門名說諸佛如来住持力了義經。文殊師利。如来所說了義修多羅其義如是。汝當奉持。

說此如来住持力了義經時。七萬五千菩薩得滿足法身。

文殊師利法王子菩薩摩訶薩。及諸一切天人阿修羅大衆。歡喜奉行

『解深密經』 711b15–21 :

爾時曼殊室利菩薩白佛言。世尊。於此解深密法門中。此名何教。我當云何奉持。

佛告曼殊室利菩薩曰。善男子。此名如来成所作事了義之教。於此如来成所作事了義之教。汝當奉事。

說是如来成所作事了義教時。於大會中有七十五千菩薩摩訶薩。皆得圓滿法身證覺。

参考文献

『解深密經』関連テキスト

- 『相續解脫經』（求那跋陀羅訳） 大正 vol. 16, no. 678, no.679.
『深密解脫經』（菩提流支訳） 大正 vol. 16, no. 675.
『仏説解節經』（真谛訳） 大正 vol. 16, no. 677.
『解深密經』（玄奘訳） 大正 vol. 16, no. 676.
チベット語訳 'phags pa dgongs pa nges par 'grol pa zhes bya ba theg pa chen po'i mdo
P no. 774, D no. 106.
『解深密經疏』（円測） 大日本統藏經 vol. 21, no. 369, [チベット語訳] 'phags pa dgongs
pa zab mo nges par 'grel pa'i mdo rgya cher 'grel pa, P no. 5517, D no. 4016（法
成訳）.

法華經関連テキスト

- 『正法華經』 大正 vol. 9, no. 263.
『妙法蓮華經』 大正 vol. 9, no. 262.
『添品妙法蓮華經』 大正 vol. 9, no. 264.
チベット語訳 dam pa'i chos pad ma dkar po shes bya ba theg pa chen po'i mdo P no.
781, D no. 113.

華嚴經関連テキスト

- 『六十華嚴』 = 『大方広仏華嚴經』（仏馱跋陀羅訳） 大正 vol. 9, no. 278.
『八十華嚴』 = 『大方広仏華嚴經』（実叉難陀訳） 大正 vol. 10, no. 279.
チベット語訳 sangs rgyas phal po che shes bya ba shin tu rgyas pa chen po'i mdo P
no. 761, D no. 44.
『十地經』 = *Daśabhūmikasūtra or Daśabhūmīśvaro nāma mahāyānasūtram* 『梵文大
方廣佛華嚴經十地品』, ed. by Ryūkō Kondō, Tokyo, 1936.
『漸備一切智德經』（竺法護訳） 大正 vol. 10, no. 285.
『十住經』（鳩摩羅什訳） 大正 vol. 10, no. 286.
『仏説十地經』（尸羅達摩訳） 大正 vol. 10, no. 287.

大集經関連テキスト

- 『大方等大集經』（「陀羅尼自在王菩薩品」「宝女品」「無尽意菩薩品」） 大正 vol. 13, no.
397.
『大哀經』 大正 vol. 13, no. 398.（「陀羅尼自在王菩薩品」異訳）
『宝女所問經』 大正 vol. 13, no. 399.（「宝女品」異訳）
『阿差末菩薩經』 大正 vol. 13, no. 403.（「無尽意菩薩品」異訳）
チベット語訳
'phags pa de bzhin gshegs pa'i snyin rje chen po nges par bstan pa shes bya ba theg pa chen po'i mdo

(「陀羅尼自在王菩薩品」『大哀経』に相当) P no. 814, D no. 147.

'phags pa theg pa chen pa'i man ngag ces bya ba theg pa chen po'i mdo (「宝女品」『宝女所問経』に相当) P no. 836, D no. 169.

'phags pa blo gros mi zad pas bstan pa shes bya ba theg pa chen po'i mdo (「無尽意菩薩品」『阿差末菩薩経』に相当) P no. 842, D no. 175.

その他

Pañcaviṃśatisāhasrikā Prajñāpāramitā vol. IV, 125,7–13, ed. by Takayasu Kimura, 山喜房仏書林, 1990.

Vimalakīrtinirdeśa 『梵藏漢対照『維摩経』Vimalakīrtinirdeśa Transliterated Sanskrit Text Collated with Tibetan and Chinese Translations』, ed. by 大正大学総合佛教研究所梵語佛典研究会, 大正大学出版会, 2004.

『無上依経』(真諦訳) 大正 vol. 16, no. 669.

二次文献

(論文)

Lamotte, Étienne [1935] *Samdhinirmocana sutra, L'explication des Mystères, Texte Tibétain Édité et Traduit*, Louvain/ Paris.

Matsuda, Kazunobu [2013] Sanskrit Fragment of the Samdhinirmocanasūtra, *The Foundation for Yoga Practitioners, the Buddhist Yogācārabhūmi Treatise and its Adaptation in India, East Asia, and Tibet*, ed. By U.T. Kragh, Cambridge, Massachusetts, and London, pp. 938–945.

伊藤瑞叡 [1983] 「華嚴経の成立」『講座大乘仏教 3 華嚴思想』春秋社, 45–77.

宇井伯寿 [1930] 『印度学仏教学研究』(第六卷) 甲子社 (1965年に岩波書店で再版).

岡田行弘 [2010] 「大乘経典の世界」『新アジア仏教史 03 インド III 仏典からみた仏教世界』(第4章), 佼成出版社, 159–210.

加藤弘二郎 [2003] 「河口本『解深密経』チベット語訳テキストについて」『印度学仏教学研究』51-2, (142) – (144).

金岡秀友 [1970] 『仏典の読み方』大法輪閣.

佐伯定胤 [1917] 『国訳大蔵経』(経部第十卷)「解深密経解題」.

佐々木孝憲 [1968] 「法華経成立論の展開」『近代日本の法華仏教: 法華研究 II』(望月敏厚編), 平楽寺書店, 563–585.

勝呂信静 [1976] 「瑜伽論の成立に関する私見」『大崎学報』129, 1–50.

勝呂信静 [1989] 『初期唯識思想の研究』春秋社.

勝呂信静 [2009] 『唯識思想の形成と展開』(勝呂信静選集第一), 山喜房仏書林.

高崎直道 [1988] 「『無上依経』と『勝天王般若』」, 『成田山仏教研究所紀要』11 (高崎 [2010] に再録).

高崎直道 [2010] 「『無上依経』と『勝天王般若』」, 『如来蔵思想・仏性論 II』(高崎直道著作集 第七卷), 春秋社, 111–133.

- 高橋晃一 [2014] 「求那跋陀羅訳『相續解脱経』と『第一義五相略』—『解深密経』の部
分訳に関する疑問—」『東方学』127, 18-34.
- 袴谷憲昭 [1994] 『唯識の解釈学『解深密経』を読む』, 春秋社.
- 深浦正文 [1933] 『国訳一切経 経集部』三「解深密経解題」.
- 渡辺章悟 [2009a] 『金剛般若経の研究』, 山喜房仏書林.
- 渡辺章悟 [2009b] 『金剛般若経の梵語資料集成』, 山喜房仏書林.

(事典)

『大乘経典解説辞典』 勝崎裕彦, 小峰弥彦, 下田正弘, 渡辺章悟編著, 北辰堂, 1997.

〈Keywords〉 解深密経, 経典編纂, 結文

たかはし こういち 東京大学大学院人文社会系研究科特任研究員

Some Questions Concerning Epilogue Phrase of the
Saṃdhinirmocana-sūtra:

Is it a vestige of the compilation of this sutra?

TAKAHASHI, Kōichi

The *Saṃdhinirmocana-sūtra* is a Mahāyāna sūtra that expounds the philosophical thought of the Yogācāra school. Some researchers believe that it comprises several texts that have different origins and dates. One of the reasons is that the last four chapters of the sutra have epilogue phrases with a fixed form. Each epilogue phrase shows the title of the chapter, and explains the fruits which listeners can acquire as a result of hearing the sutra. Such a statement can be occasionally found at the end of Buddhist canonical texts. Therefore, it is said that the last three chapters, which had been originally individual sutras, were gradually added to the basic section of this sutra.

However, the epilogue phrase of the sutra does not state that the listeners were delighted with the teaching of Buddha, something that we usually see in the general ending of sutras. As is well known, not only the Āgamas but also the Mahayana sutras close with a description about the joy of the audience. In general, this description seems to remain after the compilation of canonical texts. Some major sutras like the *Saddharmapuṇḍarīka-sūtra*, the *Buddhāvataṃsaka-sūtra*, and so on occasionally retain the expression about the delight of the audience as a vestige of compilation. In this sense, the epilogue phrase of the *Saṃdhinirmocana-sūtra* might have a figure distinguished from the usual case.

In addition, the epilogue phrases seem to show a process in which bodhisattvas gradually experience the more magnificent stages. The sutra explicates the accomplishments of bodhisattvas at the end of each chapter, namely the *anutpattikadharmakṣānti* in chapter 7, the *mahāyogamanasikāra* in 8, the *mahāyānālokasamādhi* in 9 and the *paripūrṇadharmakāyapratīsaṃvedin* in chapter 10. In this sense, the epilogue phrases might possibly indicate the context or structure of this sutra.

Accordingly, the epilogue phrase cannot be taken alone as strong evidence for the compilation of the sutra. At least, it does not prove that the last three chapters had originally been independent sutras.